

Ver 2026

# 景観まち歩きマップ

## ガイドブック

### TRAVEL GUIDE

WEB 版まち歩きマップ

解説箇所をマップで  
確認できます



～ 小川町 ～

|  |    |
|--|----|
| 小川町まち歩きマップ .....                           | 3  |
| 小川町の概要 .....                               | 3  |
| (町概要01) 町の概観—地形と川 .....                    | 3  |
| (町概要02) 武蔵の小京都 .....                       | 3  |
| 歴 史 .....                                  | 4  |
| (歴史01) 下里・青山板碑製作遺跡 .....                   | 4  |
| (歴史02) 穴八幡古墳(増尾63付近) .....                 | 5  |
| (歴史03) 路傍の板碑・庚申塔・石仏 .....                  | 5  |
| (歴史04) 聖徳太子碑 .....                         | 6  |
| (歴史05) 比企銀行(大塚141付近)と小川銀行 .....            | 6  |
| (歴史06) しまむら創業の地(相生町交差点南東側付近) .....         | 6  |
| (歴史07) 小川町駅 .....                          | 7  |
| (歴史08) 栃本観音堂と不動尊(大塚216) .....              | 7  |
| (歴史09) ヤオコー発祥の地 .....                      | 8  |
| (歴史10) 旧小川町道路元標(大塚55 役場正面付近) .....         | 8  |
| (歴史11) 馬橋と袖柱 .....                         | 9  |
| (歴史12) 旧小川郵便局開設の地 .....                    | 9  |
| (歴史13) 江戸時代からの共同墓地と石造物 .....               | 10 |
| (歴史14) 小川町駅前通り(小川町停車場線)(大塚46-1) .....      | 10 |
| (歴史15) 素麺仲買講中が奉納した大山講の常夜灯(小川221) .....     | 11 |
| 観 光 .....                                  | 12 |
| (観光01) 腰越の彼岸花 .....                        | 12 |
| (観光02) 栃本堰と栃本親水公園 .....                    | 12 |
| (観光03) カタクリとオオムラサキの林そして展示館(小川1370付近) ..... | 12 |
| (観光04) 見晴らしの丘公園(小川1442) .....              | 13 |
| (観光05) 道の駅おがわまち(小川1220) .....              | 13 |
| (観光06) 二十二夜塔とシュウカイドウ群生地(腰越1814付近) .....    | 13 |
| (観光07) 旧二葉支店(大塚1147) .....                 | 14 |
| (観光08) 造り酒屋 .....                          | 14 |
| (観光09) 帝松・松岡醸造(下古寺7-2) .....               | 15 |
| (観光10) 晴雲酒造(大塚178-2) .....                 | 15 |
| (観光11) 武蔵鶴酒造(大塚243) .....                  | 15 |
| (観光12) 武蔵ワイナリー(高谷104-1) .....              | 16 |
| (観光13) 小川農産物直売所(下横田676-1) .....            | 16 |
| (観光14) 小川げんきプラザ(木呂子561) .....              | 16 |
| (観光15) 金勝山(木呂子561付近) .....                 | 17 |
| (観光16) カタクリとニリンソウ .....                    | 17 |
| (観光17) ヘメロカリス(青山1280) .....                | 18 |
| (観光18) 玉井屋(大塚178-2) .....                  | 18 |
| 建築物 .....                                  | 19 |
| (建築01) 田中家長屋(小川177) .....                  | 19 |
| (建築02) 旧玉成舎主屋(養蚕伝習所)と大谷石の蔵(小川197) .....    | 19 |
| (建築03) 旧小川小学校下里分校(下里824) .....             | 20 |
| (建築04) 吉田家住宅(勝呂424) .....                  | 20 |
| (建築05) 小川町和紙体験学習センター(小川226) .....          | 21 |
| (建築06) 萬屋旅館(小川142) .....                   | 21 |
| (建築07) 旧腰越分校(現小川町文化財整理室)(腰越1722) .....     | 22 |
| (建築08) 福 助(小川97) .....                     | 22 |
| (建築09) 二葉本店本館(大塚32) .....                  | 23 |
| (建築10) 大谷石蔵(大塚7-4) .....                   | 23 |
| (建築11) 日向亭(ひなたてい) .....                    | 24 |

|   |    |
|---|----|
| 城 跡.....                                  | 24 |
| (城01) 小川町の山城 腰越城跡(腰越 2389 付近) .....       | 24 |
| (城02) 小川町の山城 中城跡(大塚 351 付近) .....         | 25 |
| (城03) 小川町の山城 青山城跡(青山 2293 付近) .....       | 25 |
| (城04) 小川町の山城 高見城(四ツ山城)跡(高見 1125 付近) ..... | 26 |
| 俳 句.....                                  | 26 |
| 松尾芭蕉の句碑.....                              | 26 |
| (芭蕉01) 下里の滝(下里 2933 付近) .....             | 26 |
| (芭蕉02) 小川八宮神社(小川 990) .....               | 27 |
| (芭蕉03) 石青山大聖寺(天台宗)(下里 1857) .....         | 28 |
| (芭蕉04) 大塚八幡神社(大塚 428) .....               | 28 |
| (芭蕉05) 兜川河畔の芭蕉句碑(角山 1104 付近) .....        | 29 |
| (芭蕉06) 青山氷川神社(青山 1312) .....              | 30 |
| (芭蕉07) 春日公園の芭蕉句碑(大塚 264-1) .....          | 30 |
| (芭蕉08) 松郷峠の芭蕉句碑(上古寺 471 付近) .....         | 30 |
| 金子兜太の句碑.....                              | 31 |
| 寺 社.....                                  | 31 |
| (寺社01) 八和田神社と奈良梨陣屋跡(奈良梨 929) .....        | 31 |
| (寺社02) 上小川神社(小川 68) .....                 | 32 |
| (寺社03) 大塚の八坂神社(大塚 94) .....               | 32 |
| (寺社04) 瑞龍山西光寺(曹洞宗)(小川 1277) .....         | 33 |
| (寺社05) 高勝山長福寺(天台宗)(飯田 870) .....          | 34 |
| (寺社06) 観喜山東昌寺(曹洞宗)(角山 293) .....          | 34 |
| (寺社07) 一機山輪禅寺(曹洞宗)(上横田 1215) .....        | 34 |
| (寺社08) 四津山と四津山神社(高見 1125) .....           | 35 |
| (寺社09) 薬王山瑠璃光院普光寺(天台宗)(中爪 1042) .....     | 35 |
| (寺社10) 医王山圓光寺(臨濟宗)(青山 345) .....          | 36 |
| (寺社11) 北青山円城寺(曹洞宗)(青山 654) .....          | 36 |
| (寺社12) 岩伝山高西寺(真言宗智山派)(小川 1368) .....      | 36 |
| (寺社13) 青龍山慈眼寺(曹洞宗)(青山 1609) .....         | 37 |
| (寺社14) 呑龍様(どんりゅうさま)(小川 220) .....         | 37 |
| (寺社15) 三峯神社(みつみねじんじゃ) .....               | 37 |
| (寺社16) 侍峯山高福寺(臨濟宗)(上古寺 872) .....         | 38 |
| (寺社17) 笠山と笠山神社 .....                      | 39 |
| 万葉集.....                                  | 41 |
| (万葉集01) 仙覚律師遺蹟(大塚 351 付近) .....           | 41 |
| (万葉集02) 万葉歌碑モニュメント .....                  | 41 |

(巻末付録マップ)

まち歩きMAP 駅周辺みどころ

昔のおがわ感じるルートMAP

# 小川町まち歩きマップ

## 小川町の概要

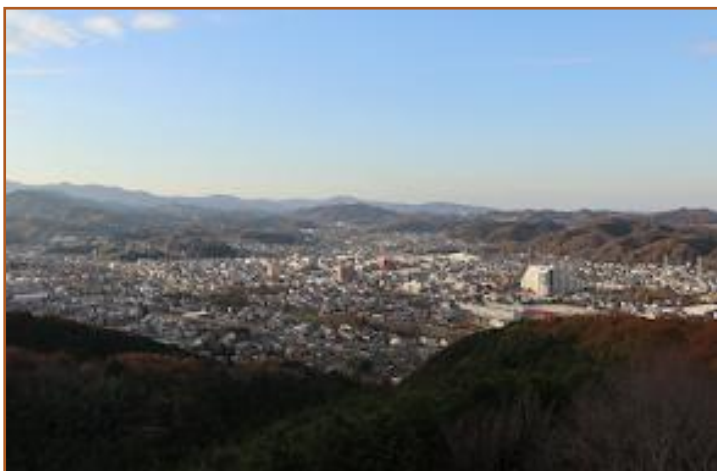
### (町概要01) 町の概観—地形と川

小川町は埼玉県のほぼ中央に位置し、広い関東平野が外秩父の山なみと接する位置にあり、四季を織りなす山々に囲まれた小川盆地の市街地の中央を槻（つき）川が流れています。この紙漉きを育んだ母なる川「槻川」は、東秩父村白石峠を源流とし、小川町腰越落合で笠山を源流とする館川の流れが合流します。小川盆地へ入った槻川は、町場を流れ下小川で兜川を合流し、仙元山の裾を蛇行して下里へ入り嵐山町へと流れ下り、やがて荒川に合流します。

小川町の地形は非常に変化に富んでいます。高い所では、東京からも見える町のシンボル笠山があり、標高837mです。その美しく優しい山容から、人びとは親しみをこめて乳首山とも呼んでいます。山頂には笠山神社が鎮座し、江戸時代までは修験者の行場として女人禁制の聖地でした。一番の低地が八和田地区を流れる市野川の標高55mで、その差は782m。この標高差の中に山地・小川盆地・丘陵地帯があります（小川町役場は標高約91m）。人びとはこの地形と川が育んできた自然を活かし、古くから和紙、絹、建具、酒造などの産業を起こし地場産業へと発展させて、町場の賑わいを築きあげてきました。



槻川栃本堰の清流



仙元山からは小川盆地を一望できる

### (町概要02) 武蔵の小京都

小川町は、山・川・地形など京都に似た自然景観や文化と歴史、伝統的産業を有していることから、武蔵の「小京都」と呼ばれています。昭和60（1985）年に設立された全国京都会議（※）に加盟しています。

#### ※全国京都会議の加盟条件

「1 文化と歴史的要件」、「2 地形・風土的要素」、「3 伝統的産業要件」の3条件があります。この要件を小川町に当てはめてみます。

## 1 文化と歴史的要件

国の重要文化財に指定されている緑泥石片岩（青石）を用いた石造法華経供養塔（六面幢・ろくめんとう）が大聖寺（芭蕉03）にあるほか、万葉集の研究者として名高い仙覚（万葉集01）が、文永6（1269）年、本格的な万葉集注釈として学問的価値の高い（万葉集注釈）全10巻をこの小川町で完成させるなど、古くからの歴史と文化のある町である。また、1300年の歴史ある手漉き和紙、特に「細川紙」（建築05）の技術は、国の重要無形文化財に指定されており、平成26（2014）年11月27日にユネスコ無形文化遺産に登録された。さらに、令和6（2024）年12月5日に「伝統的酒造り」も同じく無形文化遺産に登録された。その日本酒を造る酒蔵が今でも3軒ある。（観光08～11）



和紙の七夕飾りが通りを埋める

## 2 地理・風土的要件

小川町は、周囲を緑豊かな外秩父の山々に囲まれた京都と同じ盆地で、市街地の中央に槻川が流れる自然景観があり、歴史を秘めてたたずむ史跡や往時の面影をとどめる街並みなどの風情、伝統ある祇園祭（「おぎおんさま」がなまって、「おぎょん」と年配者は呼んでいる。）がある。さらに、敗戦の混乱が続いていた昭和24（1949）年には、「和紙の町小川」の復興を願った七夕まつりが始まった。和紙の町ながらの豪華な竹飾りに加え、当時はめずらしかった花火大会を組み合わせた祭りは大いに賑わい、町最大の観光行事として現在も続いている。

## 3 伝統的産業要件

そのほか、同じく歴史を持つ「小川絹」（建築02・10）や、森林資源を活用した「建具」、地下資源を使用した「鬼瓦」などの伝統工芸品がある。また、京都に似た盆地独特の気候と良質な地下水を活かして「伝統的酒造り」が行われてきた。（観光08～11）

## 歴史

### （歴史01） 下里・青山板碑製作遺跡

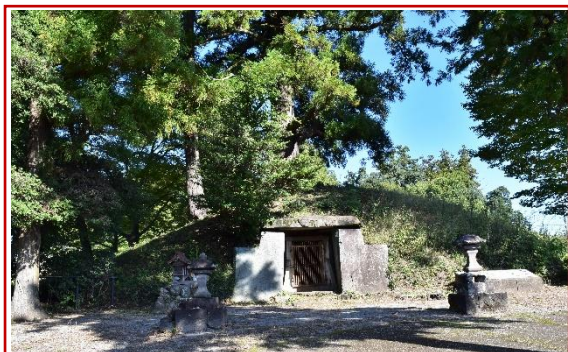
板碑は、鎌倉時代から戦国時代にかけて盛んに造立された供養塔で、関東地方には緑泥石片岩（青石・下里石）で作られた「武蔵型板碑」が5万基以上確認されています。鎌倉幕府が開かれ、東国に仏教信仰が広がりを見せた13世紀頃から、寺院の建立とともに板碑の造立が盛んになりました。その板碑を製作した場所がこの遺跡です。発掘調査などにより、板碑の石材採掘から板碑形に加工するまでの



遺跡は杉木立に囲まれた山中にある

工程が明らかになり、平成26年、国の史跡に指定されました。加工された板碑（未完成品）は素材として各地に運ばれ、造立地で板碑に仕上げられたと考えられます。

### （歴史02） 穴八幡古墳（増尾63付近）



青石で造られた石室の入口を望む

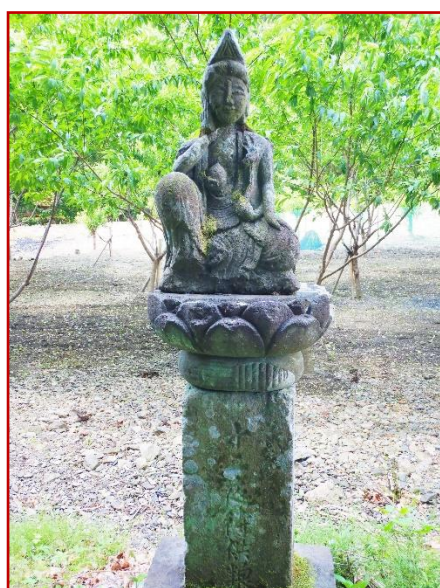
7世紀後半の古墳時代後期に造られた大型の方墳で県指定の史跡です。一辺が28.2m、高さ5.6m、周囲に二重の溝がめぐり、外周溝の長さは一辺60mにもなります。緑泥石片岩（歴史01）などの板状の石材を箱のように組み上げた横穴式石室は、奥行き8.3mと大型です。

古墳には墓誌がないため被葬者は不明ですが、この規模の築造には多くの労働力と秀でた土木技術者の集団が必要となるので、相当な権威と財力を有した者であったと考えられます。

→現地案内板で発掘調査の成果をご覧ください。

### （歴史03） 路傍の板碑・庚申塔・石仏

板碑は別名青石塔婆と呼ばれ、緑泥石片岩（歴史01）下里石・青石）で造られており、鎌倉時代から戦国時代にかけて盛んに造立された供養塔です。町内には1000基以上が確認されており、死者の追善供養や、造立者自身が生前に功德を積み極楽往生を願う逆修供養のために造立されたものが多くあります。→詳しくは、QRマップや教育委員会発行の資料を確認



如意輪観音菩薩の夜待供養塔

やがて、江戸時代に入ると、庶民の間に月待ちや庚申（こうしん）などのお日待ち信仰

が流行し始め、信仰する仲間や集落によって競うように造り祀りました。町内を散策すると、その先々の路傍に石碑や塔（歴史04・13、観光06）を見出すことができます。中でも最も多く造立されているのが庚申塔で、150か所以上が確認されています。また、下横田と青山の山中には、「百庚申」と呼ばれ、1か所に100基が立てられている場所があり壮観です。

→詳しくは、QRマップや教育委員会発行の資料を確認



祠の中には板碑・大日如来像・庚申様が

#### (歴史04) 聖徳太子碑

聖徳（皇）太子碑が町内では14基が確認されており太子堂もあります。

聖徳太子といえば推古天皇の摂政として遣隋使を派遣し、積極的に中国の先進的な文化や仏教を取り入れ、全国に広めた歴史上著名な人物です。聖徳太子信仰は、その遺徳をしのぶ職人の講として鎌倉時代から始まったとされます。寺院建立など建築史上偉大な存在と考えられていたことから、江戸時代には大工・鳶（とび）・左官・屋根屋など建築にかかわる人たち、石工、鍛冶屋、桶屋、木こりなどの職人たちの守り神として太子講が結成されました。現在も小川・大河・八和田の各地区には太子講があります。代々続いた講中によって、石造物（歴史01）が造立されてきました。

聖徳太子碑は大型のものが多く、大塚の陣屋台には高さ3mを超えるもの、大河の自性院には幅が1.8m、八和田神社には高さ2.3mのものがあります。また神明町の路傍には桶屋講中が建てた聖徳皇太子碑があります。



桶屋講中が建てた太子碑(左)と灯籠にも青石を使用

#### (歴史05) 比企銀行（大塚141付近）と小川銀行

明治17年に比企銀行は創業しました。それに近い年代に建築されたと考えられる、旧比企銀行の建物が大塚地内に残されています。近在の商人や地主が発起人となって銀行開業の願いを大蔵卿に提出、許しが出され開業しました。同年の4か月前に小川銀行も開業しています。

明治10年代に小川町に2つの私立銀行が誕生したことは、地場産業の隆盛を背景に潤沢な資金が準備できたことを意味し特筆に値します。その後、比企銀行は第八十五銀行小川支店を経て埼玉銀行（現・埼玉りそな銀行）へ、小川銀行は忍商業銀行小川支店を経て埼玉銀行へ吸収されます。→昔のおがわ写真①・⑥参照



旧比企銀行建築物(正面右の2階建て)

#### (歴史06) しまむら創業の地（相生町交差点南東側付近）

昭和6年、島村喜一氏がそれまで勤めていた呉服店から独立して、相生町に島村呉服店を創業しました。昭和28年、島村恒俊氏が呉服店を継ぎ株式会社とし、呉服に加えて洋服部で既製服と洋服の仕立てに力を入れ商売を拡大していきました。特徴は現金決済で掛け売りをしないこと、価格を他店より少しでも安くする経営努力を続けたことが現在の発展に結びついているといえます。なお、当時の建物は残されていません。

### (歴史07) 小川町駅

小川町駅は、大正12年に東武鉄道東上線の開通によって建設された駅舎です。昭和9年には国有鉄道八高線が開通して乗り入れ、さらに利用者は増大しました。駅舎は補修・増築を加えて使用され、戦中・戦後の激動から今日まで、開業当初の姿を残したまま1世紀にもわたり乗降客を見守り続けています。(歴史14)



信号機がない駅前には皆が小川ルールを守る

鉄道を小川町に通すのはゼロからのスタートで、官民一体となった誘致運動は十数年に渡りました。大正12年

11月に開業し、町主催の祝賀会が盛大に行われました。

- ・大正12年11月5日：東武鉄道東上本線の駅として開業。
- ・昭和9年3月24日：国有鉄道八高線・越生～当駅間が開通。

そして、令和5年11月に、開業100周年を迎えました。

### (歴史08) 栃本観音堂と不動尊 (大塚216)

大塚の緑町は古くは栃本といい、奈良時代に行基上人(日本最初の「大僧正」)が秩父行脚の途中この地に立ち寄り、観音像を刻み小庵に安置したことが観音堂の始まりと伝わっています。その後観音堂は数度にわたり焼失し、現在のお堂は明治時代に再建されました。



お堂の中央には不動明王像が祀られている

不動尊は、慶応3(1867)年に地元の講の人たちが千葉県成田山新勝寺から勧請して、「成田山不動尊」として祀りました。その頃からお堂は不動様と呼ばれるようになりました。

境内の小さな広場には、ペンキが剥げて錆びついた滑り台やブランコ、そして鉄棒……ここを訪れると、幼いころにタイムスリップしたかのような懐かしい思い出が蘇るのでは。

毎年、節分会(え)には盛大な豆まきがおこなわれます。



### (歴史09) ヤオコー発祥の地

ヤオコーは、明治23年、八王子と上州、川越と秩父を結ぶ街道の交差点の一角（現・本町二丁目）に、生塩類・干魚・青物を商う「川野幸太郎商店」として開業しました。明治35年に発行された埼玉県営業便覧には「八百幸」とあります。昭和20年代には、鮮魚・野菜・果物・乾物等を扱う小売と卸しの食料品店として店は繁盛しました。

昭和30年代には、近隣に先駆けて会社組織化し、有限会社八百幸商店となるのに合わせて、近隣に例を見ないセルフサービス制を導入したスーパーマーケットを開店。

昭和47年、川野とも氏の英断と努力により、創業地から駅前に店舗を移して小川ショッピングセンターを開業。これが、「ヤオコー」の近代化と躍進の足がかりとなりました。その後さらに店舗数を拡大し続け、平成9年、会社設立から41年目にして東京証券取引所第一部へ上場する企業へと成長。令和7年10月にグループ会社化して設立された親会社は、最も審査基準の厳しい東証プライム市場に上場されて国内有数の一流企業となりました。



秩父街道と八王子街道交差点角地にあった



小川町7-スーパーマーケット第1号

### (歴史10) 旧小川町道路元標 (大塚 55 役場正面付近)



役場の正面入口の左側に移設されている

道路元標は大正時代に、旧道路法施行令で「道路原標ハ各市町村二一箇ヲ置ク」と定められたことにより、道路の起点・終点を表示する標識です。近代的な道路網を整備するための基準地点に設置され、内務省令で材質や寸法、設置場所についても細かく定められました。

旧小川町の道路元標は、現在の本町二丁目交差点に標石として設置されました。ここは主要街道の秩父街道と八王子街道が交わる古くからの交通の要衝(歴史09・11・12)であったことから、起点とされました。

戦後、その役割を終え忘れ去られていましたが、旧小川町のものは平成16年に役場前に移設し保存されています。旧八和田村のも

のは、県道熊谷小川秩父線と菅谷寄居線が交わる奈良梨の交差点の片隅に、旧大河村のものは、秩父街道沿いにある大河公民館前バス停の反対側のバス停の隣にあります。

### (歴史11) 馬橋と袖柱

八王子街道(歴史09・10・12)は昔から人や荷車の往来が多く、特に馬は大量の荷役を運べることから大切にされました。明治の中頃、この八王子街道に新しい橋が架けられ、その時に「馬と一緒に通れる橋ができた」と人々が口にしたことから、「馬橋」と名付けられたと伝えられています。

昭和6年、鉄筋コンクリート橋にかけ替えられました。橋のらんかんはコンクリート製ではあるものの西洋風の優雅なデザインとなり、袖柱は重厚な門柱を思わせます。橋を往来する人馬の転落を防護し見守り続けた欄干は、度重なる改修工事で撤去されてしまい、今はその一部が残るだけで、気づく人はまれです。

馬車が通れた橋も、今となっては幅員が狭く対面通行はできないので、譲り合いの橋となっています。



柔らかな造形が見られる

### (歴史12) 旧小川郵便局開設の地



2階建ての建物の前に局舎はあった

(注意！個人所有地内なので邸内を覗かないで下さい！形跡も全くありません)

明治4年、官営郵便制度が前島密(まえじまひそか)によって整えられ、翌5年には川越・熊谷などととも、旧小川村に郵便取扱所が開設されました。場所は郵便取扱人となった笠間嘉八郎家(現・本町二丁目交差点)で、明治8年には小川郵便局となります。→昔のおがわ写真④参照(左奥に門とヒヨロヒヨロの松、右奥に笠間家の屋

根瓦が写っているのが見えます。)

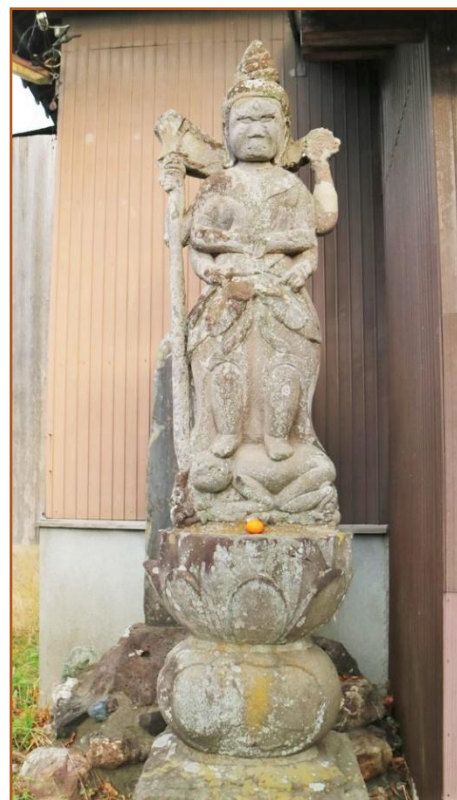
郵便局舎は、郵便物の取扱量の増加に伴い数回移転し、昭和52年に現在地青山に移転しました。旧小川町道路原標(歴史10)は、写真正面左側の路地の左角に設置されていました。その場所には、縦横25cmほどの小さな表示板が路面にはめ込まれているので見つけてみましょう。ヤオコー発祥の地(歴史09)は交差点の対角にあり、どちらも交通の要衝の地に位置していたことが分かります。

### (歴史13) 江戸時代からの共同墓地と石造物

槻川の馬橋(歴史11)がある左岸一帯は、通称カワランジョと呼ばれ、千日堂・呑龍(どんりゅう堂(寺社14))・お籠(こもり)堂などとともに、江戸時代からの共同墓地があります。また、庚申塔、女人講の女性たちによって建立された二十二夜塔、馬頭観世音塔、六地藏尊などの古い石造物も多く、ここは人々の信仰を集めた地となっています。

小川の「町場」と「市」は、江戸初期に周辺を支配していた玉川代官によって計画的に造られた場所です。商業機能に特化したことから、町場内には寺院や墓地が作られませんでした。そのため、ここに共同の墓域が設けられ、後に千日堂が建てられました。仏事の際には、同じ小川村である対岸の西光寺(寺社04)又は高西寺(寺社12)から僧侶に向いてもらいました。

写真の立像は庚申塔です。この像をよく見ると、頭上にはとぐろを巻いた蛇、額の中央にも眼があり、六本の腕を持ち色々な法具を握っています。蓮華座の下の丸い石には雌雄つがいの鶏、四角い台座には「見ざる」、「聞かざる」、「言わざる」、それぞれのポーズを取る三匹の猿が彫られており、見応えのあるものです。



憤怒の相で邪鬼を踏みつける青面金剛

### (歴史14) 小川町駅前通り(小川町停車場線)(大塚46-1)



右側に見える2階家は新井屋旅館(昭和の風景)

駅前通りは小川町停車場線と呼ばれる埼玉県が管理する道路です。大正12年の東上線開通(歴史07)にあわせて小川町駅のメインストリートとして造られました。道ができるとそこに新しい商店街が形成され、古くからの秩父往還(歴史13の市)とあわせて町場となりました。

かつての繁華街も、現在は空地やシャッターを下ろした

店が多くなりますが、小川の町なみを気に入った方たちが空き店舗をリノベーションして、素敵な店をオープンする新たな動きがあります。写真の旅館も、現在は1階がレストラン「エシカル(Ethical)」、2階は小川宿「鴻倫」として営業しており、町の情報発信や訪れる人たちとの交流に力を入れています。

(歴史15) 素麺仲買講中が奉納した大山講の常夜灯 (小川 221)



馬橋のそばに、文政4（1821）年夏6月建立、「石尊大権現（セキソンドイゴンゲン）」と刻まれた石灯籠があります。これは神奈川県伊勢原市にある山岳信仰の対象の山「大山」と、山と水の神とされる大山祇大神（オオヤマツミノオオカミ）を祀った「大山阿夫利（オオヤマアフリ）神社」、仏教寺院の「雨降山大山寺（アブリサンオオヤマデラ）」などがあり、それらが融合した神仏です。古代から、一山全体が神仏習合の霊場として崇拜されてきました。

槻川の流域には、江戸時代から脱穀や製粉をするための水車が回っていました。やがて小麦粉を原料とする素麺作りが始まり、空気が乾燥する冬の農閑期、農家の副業として盛んになりました。「小川素麺」の特徴は、白ごま油を使って伸ばしたので、食欲を誘う香りが好評となり、小川ブランドとして川越を經由して大消費地の江戸に出荷されていきました。

製粉用の水車を動かすための水路には、冬の渇水期であっても常に一定量の水が流れていなければなりません。そこで、素麺の仲買人や素麺づくりなどに携わる者たちは雨乞いのため、また立身出世を願う者たちも講を組織し、大山詣りを行いました。さらに講中は、雨降らしのお礼と槻川の流れをいつまでも見守り続けていただけますようにとの願いを込めて、常夜灯を奉納したのです。素麺の生産をしなくなった今でも大山信仰は残り、大山詣りでは続けられています。



台座には上小川へ遷座した稻荷神社への奉納狐

## 観 光

### (観光01) 腰越の彼岸花

秋のお彼岸を待っていたかのように、真っ赤に咲くヒガンバナ（※彼岸花）。曼珠沙華（まんじゅしゃげ）とも呼ばれる多年草で、槻川に築かれた腰越堰周辺の群生地は赤く燃えるように染まり見事です。（万葉集46）→※アルカロイドを含む毒草なので絶対口にしないでください。



槻川腰越堰付近のヒガンバナ

### (観光02) 栃本堰と栃本親水公園



飛び石の向こうに公園、彼方には笠山と堂平山

槻川に栃本堰（小川堰）が築かれ、小川用水が引かれた歴史は古く、元禄3（1690）年の大塚村絵図にすでに描かれています。用水によって引かれた水は、水田などの農業用水となり、さらに生活用水として利用され、町場の発展を支えてきました。

栃本親水公園は、埼玉県の水辺再生事業を活用して町が造営したものです。「モミジと水車」をテーマに、50本のモミジを植え、水車が作られました。これはかつて槻川沿いに点在し、

町の地場産業（歴史15）を支え、原風景でもあった水車を再現したものです。あずま屋やトイレ・遊具などもあり、四季を通じて老若男女が楽しめます。また、対岸沿いに整備された遊歩道には、飛び石で渡れるようになっています。青ペンキで塗られた水門脇は、笠山（寺社17）・堂平山のビューポイント、川の流れを身近に感じながら渡り、山なみを眺めながら深呼吸をしよう。（増水時は危険！）→昔のおがわ写真⑤

### (観光03) カタクリとオオムラサキの林そして展示館（小川1370付近）

カタクリの自生地（観光16）は、埼玉伝統工芸会館と見晴らしの丘公園を結ぶハイキングコース沿いにあります。3月下旬から4月上旬にかけて可憐なカタクリの花が斜面に咲き乱れ、また国蝶オオムラサキの住む雑木林があります。展示館があり、オオムラサキをはじめ世界中の蝶や昆虫の標本を見ることができます。休憩スペースもあるので訪ねてみませんか。



昆虫好きの方は必見

**(観光04) 見晴らしの丘公園 (小川 1442)**

公園は、町の南側に位置する仙元山の中腹にあります。自然地形を生かした公園となっており、四季折々の移ろいを体感できます。展望台は公園名のとおり、小川だけでなく近隣の町や遠く関東の名山秀峰の絶景が見渡せます。空気の澄み渡る冬場がおすすめ。

人気なのは、小川盆地を眼下に見下ろしながら203mの長さを一気に滑り降りるローラーすべり台、子どもも大人も楽しむことができます。また、子ども向けの木製フィールドアスレチックで遊ぶこともできます。



桜もよし！ 寒風の中、山容の眺めはイチオシ！

**(観光05) 道の駅おがわまち (小川 1220)**



道の駅は仙元山のふもと国道254号沿いにあります。令和7年5月に全面リニューアルオープンに合わせて新築した建物には、レストランとファーストフード店が入り、地元の新鮮な農産物や特産物を販売するコーナーなど充実した施設になりました。たびたびテレビ放映もされているため盛況です。また、小川和紙の紙漉き体験のできる和紙工房や和紙製品の販売コーナーもリニューアル。さらに芝生広場が新設

されました。そこには、子どもたちが大好きなふわふわドームや遊具が設けられ、電動トゥクトゥクや電動自転車なども貸し出しています。

広場のすぐ先には、紙漉きを育んできた槻川が流れており、ピッカリ千両の紙漉きの里から仙元山(観光04)の四季ごとの移ろいを眺めてはいかが。

※ 詳しくは町のHPをご確認ください。



**(観光06) 二十二夜塔とシュウカイドウ群生地 (腰越 1814 付近)**

腰越の赤木には、「二十二夜塔」と彫られた石造物があります。この塔は月待信仰のうちの一つ、二十二夜講の人たちによって造立されました。講は女性たちだけのもので、旧暦二十二日の夜に月の出を待ちながら飲食をともにし、如意輪(によいりん)観音菩薩に念仏を唱えて、子どもの健やかな成長や家族の無病息災を願いました。江戸時



代、舅（しゅうと）や夫のいないところで女人だけで語り合える息抜きの場として、講が発展したのです。

町内には、頬に手を当て思惟（しい）する姿の菩薩像（歴史03）や文字だけを刻んだ塔などあわせて60基以上が確認されており、女人講が盛んであったことを物語っています。

赤木の二十二夜塔の周辺は、秋海棠（シュウカイドウ）の群生地になっています。秋、母の愛のように優しいピンクの花があたりを埋め尽くします。

### （観光07） 旧二葉支店（大塚1147）

この建物は、東武鉄道東上線の開通をにらみ小川駅前（歴史07・14）に建築された二葉（建築09）支店という飲食店で、大正11年に開業しています。それを町が譲り受け、小川町産の木材をふんだんに使用してリノベーションを行い、観光・移住案内所「MUSUBIME（むすびめ）」としてオープンさせました。



ここで食事や宴会をした人はあまたいる

1階部分では、観光案内や地場産品の紹介と販売をしています。朝ここに立ち寄り観光や食事処のパンフレットを入手して手ぶらで気ままにまち歩きを楽しみ、帰りに小川の特産品をお土産にするのが良いでしょう。また、ここではレンタサイクルも貸し出しています。休憩のスペースも設けてあるので、バスや電車待ちの際にご利用ください。

### （観光08） 造り酒屋

小川町の特色ある産業の一つとして酒造業が挙げられます。多くの蔵元を抱える小川は、昔から「関東灘」とも言われ、灘に負けない良い酒を育くむ気候風土を有しています。明治35年発行の「埼玉県営業便覧」によると、小川町内の酒造業として、嶋屋・平松庄作、玉井屋・村山米造、玉井屋・中山房五郎、中山徳太郎の四軒が掲載されており、現在でも下古寺の松岡醸造、大塚の晴雲酒造、同じく大塚の武蔵鶴酒造の三軒の造り酒屋（町概要02-3）があります。松岡醸造、晴雲酒造、武蔵鶴酒造はともに創業者は越後の杜氏（酒を造る職人）です。屋号玉井屋の初代は新潟県柏崎市の出身です。

小川盆地特有の冬の底冷えと清らかな水に支えられながら、三者三様の味・香りを追

い求め、ユネスコ無形文化遺産に登録された「伝統的酒造り」によって、おいしい酒を醸しています。まち歩きをしながら酒蔵を訪問し、飲み比べをしてはいかがでしょうか。

### (観光09) 帝松・松岡醸造 (下古寺 7-2)

嘉永4年(1851)の創業です。初代松岡祐工門は、現在の新潟県上越市柿崎区出身です。屋号は大坂屋と名乗りましたが、その由来は不明です。酒屋同士の婚姻も多く、深谷市の滝澤酒造(菊泉)とも姻戚関係だといえます。初代がこの地を選び蔵ごと移転してきたのは、仕込みに使う良質な水に恵まれていること。そして、物資の集散地であり毎月多くの市が立ち、商人が集まる場として栄え、酒の消費が見込めることに着目したのだといえます。(「小川町の歴史 別編 民俗編」及び同社HPより引用)



おなじみの帝松(みかどまつ)の商標

### (観光10) 晴雲酒造 (大塚 178-2)



敷地内には仕込水の「玉の井」がある

晴雲酒造は現在で三代目です。初代の中山徳太郎さんは、栃木市大宮の造り酒屋・中山家の次男で、現在の晴雲酒造の場所にあった造り酒屋、村上家の娘さくさんと結婚しました。村上家は、さくさんの父が新潟県柏崎市鉢崎の出身で徳太郎の父も同様であり、いとこ同士の結婚であったといえます。なお、武蔵鶴酒造の中山家も鉢崎の出身で、さくさんとは従兄弟の関係でした。酒屋もんとして小川の地に来たといえます。さくさんの実家である村上家は、明治34年に酒仕込中に腐造が発生したため廃業し、翌年の明治35年、妹夫婦である中山徳太郎・さくさんがその跡を継いだといえます。(「小川町の歴史 別編 民俗編」より引用)

### (観光11) 武蔵鶴酒造 (大塚 243)

屋号玉井屋は、(観光08)のとおり初代は新潟県柏崎市鉢崎の出身です。もともとは、現在酒販店の玉井屋のある場所で創業していましたが、敷地が狭いため、現在の場所に移転しました。この際、二代目の兄弟が元の敷地で酒販店を同じ屋号の玉井屋として創業しました。(「小川町の歴史 別編 民俗編」より引用)

※現在、休業中です。



建物も地元の素材にこだわった

(観光12) 武蔵ワイナリー (高谷 104-1)

小川は有機農業が盛んな町として、新たに農業を志す者やオーガニック食材を使用するレストランシェフや消費者に知られています。ここに新たな特産品、オーガニックワインを醸造する「武蔵ワイナリー」が誕生しました。

ブドウは、雑菌に侵されると房ごと腐ってしまい全滅することがあります。ワインの本場フランスでも、殺菌剤であるボルドー液を使用しても無農薬栽培として名乗る

ことが認められています。武蔵ワイナリーでは、ボルドー液さえ使わない完全な無農薬・有機農法で栽培した自家農園ないし契約栽培のブドウのみを使用して醸造しています。醸造後のビン詰めの際にも、酸化防止剤など一切添加しないといえます。

(観光13) 小川農産物直売所 (下横田 676-1)

小川町自慢の「おがわん」野菜や季節の切り花、山菜などを販売しています。誰が生産したのか分かるようになっており、美味しい食べ方、レシピも紹介しています。お米も玄米を自分の好みの精米歩合に調整してくれます。

→詳しくは、[小川農産物直売所HP](#)をご覧ください。

(観光14) 小川げんきプラザ (木呂子 561)

げんきプラザは、金勝山 (観光15) の豊かな自然のなかに作られた、子どもたちが様々な野外活動を体験し、学習するための社会教育施設です。宿泊設備とレストランは本館にあり、ほかにバンガローや炊事場もあるので、キャンプ合宿や研修に最適です。プラネタリウムも人気があります。

またプラザ周辺は、建設の際に周辺の木を全て伐採し、新たに植林をしたことから、多様な植生が作りだされ、今は自然と同化しましたが、通常この地域では見ることのない動植物を観察することができます。

→詳しくは、[げんきプラザHP](#)をご覧ください。



中央の円い屋根はプラネタリウム棟

(観光15) 金勝山 (木呂子 561 付近)

金勝山は、小さいながらも変化のある山で、主峰が裏金勝、南峰を桜の峰、さらに西金勝の三峰からなります。その昔、山には松の大木があり、風で幹や枝葉が擦れる音が琴を奏でるように聞こえたことから、「琴松山 (きんしょうざん)」とも呼ばれたようです。

また、この山は周囲の山々からは独立した峰となっており、山全体が秩父山地でもっとも古い、2億5000万年にできたとされる花崗岩 (石英せん緑岩・別名御影石) の地層となっています。大きな根なしの山の塊は、別の場所から移動してきたものと考えられています。興味を持たれた方は、「パンゲア大陸」・「大陸移動説」・「プレートテクトニクス」を調べてみましょう。

昔々その昔、大男の「**でいだんぼう**」(※) がドッコイショと腰を掛けるために、はるか彼方、秩父のひと山をつかみ取ってここに置いたのかも。

※ 小川町立図書館HP「民話と伝説②」参照



げんきプラザのプラネタリウム棟が見える

(観光16) カタクリとニリンソウ



万葉集では「堅香子」(かたかご)と詠まれている

カタクリは、丘陵地の森や林の湿潤な木陰に薄紫色の花を咲かせます。町内には下小川 (観光03・寺社04) と下里の槻川右岸に群生地があります。万葉の時代から日本の各地で大群生していましたが、その球根を食用カタクリ粉の原料として大量に採取したため、ほとんどが絶滅してしまいました。小川では、絶滅しかけたものを地元有志の保護活動により見事によみがえらされました。春、斜面全体はカタクリ (万葉集60) の薄紫色の花に覆われます。その咲き姿は、少女が恥じらいうつむいているかのよう。



また、下里では4月上旬からカタクリに混じり、ニリンソウ（双子姉妹が寄り添うような二輪の花）が純白の小さく可憐な花を咲かせます。

**(観光17) ヘメロカリス (青山 1280)**

ヘメロカリスは、日本のカンゾウ、キスゲの一種です。英名ではデイリリーと言われるように、一日で萎んでしまう儂い花ですが、多花性なので次々に咲き続けます。

町内では、青山の畑にたくさん植えられており、梅雨どきの曇り空の下、明るい色とりどりの花を咲かせひとときわ輝きを放ちます。

コロナ禍が過ぎた令和5年から一般公開を再開しました。

→詳しくは、[岡本自然農園のHP](#)をご覧ください。



開いた花のわきには待ちきれないつぼみが

**(観光18) 玉井屋 (大塚 178-2)**



小川町は有機農業の町。玉井屋は、地元の農家が丹精込めて育てた無農薬野菜と蔵元晴雲酒造の「玉の井」と呼ばれる日本酒の仕込水を使って作る創作料理を提供する飲食店です。酒蔵の重厚な建物の中にあり、その一角には、100年以上の歴史を感じさせる黒光りした帳場が残されており見学も可能です。

→詳しくは、[晴雲酒造のHP](#)をご覧ください。

## 建築物

### (建築01) 田中家長屋 (小川177)



喧騒は聴こえず、ひっそりと静まり返っている

古くから町場として栄えた小川の町並みは川越秩父街道（現・国道254号）沿いに造られ、さらに北裏、南裏とよばれる「町裏」が形成されています。田中家長屋は南裏にあり、通りの湾曲に沿って弧を描くように建てられています。幕末の建築と伝わりますが、棟札などの年代を確定する資料は見つかっていません。しかし、「和釘」が使われていることから明治30年代以前の建築と推定されます。

長屋には、芸妓屋、小間物商、針医、餅菓子製造業、印判師、人力車夫と様々な職業の人が入居していたと記録に残されています。もともとは六軒長屋でしたが、昭和50年代前半に東側の一軒を切り離し、現在の五軒長屋にしたといえます。屋根は平成9年以降に瓦葺からカラー鉄板平葺に葺き替えられました。

町場の裏通りの小道に面するこの建物は、往時の庶民の暮らしぶりを今に伝え、**国の登録有形文化財**（2021年2月4日）に登録されています。

### (建築02) 旧玉成舎主屋（養蚕伝習所）と大谷石の蔵 (小川197)

玉成舎（ぎょくせいしゃ）は明治18年に養蚕の改良に取り組む松本嘉三郎らによって、新たな養蚕方法や技術を基礎から学ぶ伝習所として創設され、絹のまちの発展に貢献しました。

主屋建物は明治21年に建てられ、技術伝習や品評会が行われたほか、講演会・演説・会議など多目的の集会場としても利用され、田口卯吉（経済学者・政治家）や板垣退助（明治維新の元勳）も訪れた記録があります。

玉成舎主屋は、当時大塚地内の相生町にありましたが、昭和6年に一部が稲荷町の現在地に移築されました。昭和36年に増築した大谷石の蔵とともに、絹による繁栄ぶりを今に伝える建物です。

**主屋と石蔵は、ともに国の登録有形文化財**（2021年2月26日）に登録されています。現在はリノベーションされ、レストランやカフェバーに生まれ変わり、地元の有機栽培野菜を使った料理が味わえます。NHK番組、「ふるカフェ系ハルさんの休日」でも紹介されました。その時の題名は「埼玉・小川町・2548年？に建てられた巨大木造カフェ」でした。（神武天皇が即位した紀元から数え、2548年後が明治21年に当たります。）



いつもは静かな教養場所も、ときには大熱弁の会場に

(建築03) 旧小川小学校下里分校 (下里 824)



下里分校の前身は、明治7年に大河原小学校支校として開校しました。その後、教育制度改正に伴い、大正14年、小川第一尋常高等小学校（現・小川小学校）の分教場（分校）となりました。その後、児童数の減少が続いたため、平成23年に廃校となりました。

現在残されている校舎は、昭和39年に建築された建物です。昭和の時代の木造校舎は老朽化に伴

いほとんどが解体され、鉄筋コンクリート造の建物にとってかわったため、現存する校舎は貴重です。その役割を終えた学校は静まり返り寂しい限り。しかし、思いを込めて植えられた桜は毎年咲いて、入学式もなく元気な子どもたちがいなくなった校舎を励ましているかのようです。

校舎の一部は、昭和レトロ気分を満喫できる、**分校カフェ「モザート」**に生まれ変わりました。地元の有機栽培野菜にこだわった健康志向メニューが人気です。

(建築04) 吉田家住宅 (勝呂 424)

吉田家住宅は、棟札により享保6（1721）年に建てられたことがわかります。建築年代が判明する民家の母屋としては、県内最古の貴重な建築物です。平成元（1989）年に**国の重要文化財の指定**を受け、未長く保存されることになりました。平成8年、建築当初の姿に戻すための解体復元工事が行われ、入母屋造り茅葺屋根の重厚な民家が3年という年月をかけて見事に復元されました。

現在、この古民家では、囲炉裏端（いろりばた）で飲食もとれるようになっており、四季折々にイベントも開かれています。



座敷わらしがいたらいいな

(建築05) 小川町和紙体験学習センター (小川 226)



かつて型絵染・人間国宝の芹沢銈介が訪れ和紙をほめたたえた

この建物、時代は不況のさ中でしたが、埼玉県と小川町や関係町村が和紙産業の発展を目指し、研究・技術指導・経営向上に取り組めるよう大きな期待を込めて造営されたものです。研究所の設立は、小川町の和紙産業の発展に大きく貢献し、無名であった小川和紙の存在を全国的に知らしめ、その名を高めました。戦争に入ると和紙が風船爆弾に使われるなど、軍事需要が増大しました。戦後は技術改良や品質向上をはじめ、細川紙の技術保存にも中心的な役割を果たしてきました。→昔のおがわ写真②

不況下でありながら斬新な意匠が取り入れられた建物は、モダンなたたずまいを現在に残しています。今は小川町に引き継がれ、小川町和紙体験学習センターとして、細川紙の製造技術継承や手すき職人の後継者育成の中心施設となっています。

この建物は、もと埼玉県立製紙工業試験場として使用されていたものです。昭和10年3月に、埼玉県小川製紙研究所としてスタートし、たびたび名称を変え、最終的には小川製紙工業試験場となりました。

この約65年間、小川和紙の研究と振興を牽引してきましたが、和紙産業の衰退と施設の老朽化に伴い、平成10年に閉鎖されました。

昭和11年に新築されたこ

(建築06) 萬屋旅館 (小川 142)

町場の中心を貫く秩父街道(現・国道254号)沿いには、貴重な歴史的建造物が多く残っています。

萬屋(よろずや)旅館もその一つで、幕末の創業と伝えられる宿です。薬局がない時代、越中富山から家庭常備薬を売りに来る商人は、萬屋を定宿として町内や近郷を廻ったとされます。現在、営業はしていません。

建物は、街道に面する側の間口が狭く奥行き長い長方形の土地に建物が配置されている「町家造り」となっています。南裏通り側にも趣向を凝らした玄関と土塀があり、こちらはかつて「旦那衆」を迎える専用のものであったそうです。小川は大正2年に



旅籠(はたご)という言葉がピッタリ!

特設電話が開通しています。それと同時に申込みをしたという証である「電話二番」とガラス扉に書かれた電話ボックスが今も館内に残されています。ちなみに、一番は小川郵便局で、四番が町役場です。

### (建築07) 旧腰越分校(現小川町文化財整理室)(腰越1722)

分校の始まりは明治35年です。この年、大河尋常高等小学校が新築され、全村がひとつの通学区となりました。しかし、大河村は森林面積が広く、奥地の家からふもとの学校まで往復することは低学年の子どもの足では無理なため、その対応として腰越・古寺・青山の3地区に分教場(分校)が開設されました。

昭和30年に1町3村が合併し、今の小川町になってから昭和54年3月までは、町内には4つの分校がありました。腰越分校では、多い時には36名の児童が学んでいましたが、その後は減少をたどり、平成19年に廃校となりました。

この建物の半分は明治時代の開校時に建てられたもので、120年余りを経過したことになります。この間にはいくつもの戦争がありましたが、山里の小さな分校は何事もなかったように静寂に包まれています。



こぢんまりとしており左右対称性の美しさを持つ

### (建築08) 福助(小川97)



重厚な店構え、別棟が北裏通りまで続いている

福助は、町場の中心を貫く秩父街道(現・国道254号)沿いに、安政2(1855)年創業した割烹で、昔は旅館も兼ねていました。

二代目のときのこと、知人が身請けした遊女を預かり世話を続けました。遊女は死の間際にお礼にと、我が生家で秘伝とされている鰻のかば焼きのタレの作り方の極意を、主人に伝授したそうです。それに因み、「女郎うなぎ」と名付けられ名物となりました。

現代に入ってから、皇室の方や著名人が訪れてその相伝のタレを使ったかば焼きを賞味しているとのこと。

→詳しくは、[福助のHP](#)をご覧ください。

→[昔のおがわ写真⑦](#)

(建築09) 二葉本店本館 (大塚 32)



鉄舟の書を基にした扁額が客を出迎える

二葉本店は、江戸時代に町場の中心を貫く秩父街道（現・国道 254 号）沿いに創業し、昭和 8 年に駅前通り沿いに新築移転しました。本館建物は大規模な数寄屋建築で、特に鉄さびを利用した「さび壁」は、現在では復元はできないとされます。敷地内にある池の上にせり出すように建てられた離れが、茶室を兼ねた「六六（ろくろく）亭」です。本館建物とともに国の登録有形文化財（2004 年 7 月 23 日）に登録されています。

かつては割烹旅館として営まれていた同店名物が、日本五大名飯のひとつ「忠七めし」です。名付け親、山岡鉄舟（てっしゅう＝通称・鉄太郎）は、勝海舟や西郷隆盛をも感心させたというほどの豪胆無比の幕臣であり、剣、禅、書の達人。鉄舟の生家である旗本小野家は、竹沢郷の木呂子村を知行（ちぎょう）地として治めており、鉄舟が書家に欠かせない和紙を求めて小川を訪れた際の定宿が二葉でした。そのおりに鉄舟から、「料理に禅味を盛ってみよ。」と示唆され、当主の忠七が見事に答えて饗した膳が、「忠七めし」です。文化財を十分に見学した後は、剣・禅・書の淡妙なる三味を楽しんではいかが。

→詳しくは、二葉のHPをご覧ください。

(建築10) 大谷石蔵 (大塚 7-4)

小川の町場には、北裏通りを中心に白や黒の漆喰壁のもの、大谷石を積み上げたものなどいくつもの蔵が残っています。その中で異彩を放つのが、小川町最大のこの石蔵です。多孔質なため湿度調整能力に優れた大谷石で造られています。その機能を生かし、昔は秩父から大量に運ばれた煙草の葉を保管しました。その後、絹問屋である三協織物（株）がデリケートな生地を保管する蔵として利用してきました。絹の町（町概要02-3）でもあった小川には、和服の裏地の絹生地を中心に扱う問屋が多く、同社は現在も営業を続けるその代表です。



現在は、内部をリノベーションし、コワーキングロビー「NESTo（ネスト）」として生まれ変わりました。外観の重厚な雰囲気とは違い、内部は木のぬくもりをプラスした大きな空間。各種イベントも開催しており、コーヒーや食事も楽しめます。

### (建築11) 日向亭(ひなたてい)

小川赤十字病院の緑に囲まれた高台、日向山に正六角形のユニークな建物があり、今は「日向亭」と呼ばれています。この建物は、日本赤十字社埼玉県支部社屋の附属施設として、明治38年に浦和(現・さいたま市)に建築されたものです。

昭和57年、支部社屋全面移転に伴い旧施設の全てが埼玉県に移管されると、由緒ある建物を永く保存しようとする気運が高まり、本館は嵐山町に、附属施設の六角形の建物は当町の小川赤十字病院に移築保管が決まりました。

かつては、重要行事の際の貴賓室として大切に使用されてきたため、70年以上経過していたにも関わらず痛みは少なかったといえます。現在地への移転に合わせて内部は和室に改装されました。その時に「日向亭」と命名し、職員の修養施設として活用され今日に至っています。



六角形の建物は、寺社建築物以外は数少ない

### 城 跡

小川町域を取囲むように、山城跡や砦跡が残されています。河越城と鉢形城を結ぶ街道沿いに位置していたことから、鎌倉時代から戦国時代かけて様々な戦いの舞台となりました。戦に備え守りを固めるために連携し、相互に補完するように築かれた山城が槻川流域には、ときがわ町・嵐山町・小川町にまたがる小倉城、さらに盆地を眺められる山上に青山、中、腰越の三つの城、その上流の東秩父村に安戸城があります。郊外には、鎌倉街道を俯瞰することができる四津山の頂に、高見城が築られました。



戦の狼煙(のろし)が上げられたらう腰越城

### (城01) 小川町の山城 腰越城跡(腰越2389付近)

腰越(こしごえ)城跡は小川町腰越と東秩父村との境界近くであり、官ノ倉山へ続く丘陵の尾根上に立地しています。城は、秩父谷の入口を守る重要な地点にあり、川越・松山・鉢形の城を結ぶラインを守る重要拠点の一つでした。松山城主上田氏の家臣である山田氏は、落城する天正18(1590)年まで腰越城を守ったとされています。

山の標高は約216mで頂部に本郭が築かれています。東秩父の安戸城の動静とふもとの物見に適した位置の山であるとともに、山すそは槻川に削られ断崖となっており、守りに易く攻めに難い天然の要害が選ばれています。

(城02) 小川町の山城 中城跡 (大塚 351 付近)

中城 (なかじょう) は、小川駅から西南方向の直線で650mほどのところにある八幡台 (はちまんだい) と呼ばれる小山に築かれた山城です。伝承によれば、鎌倉時代に猿尾 (ましお) 太郎種直が城を構えたとされていますが、発掘調査によって、2世紀ほど後の15世紀後半の築城であることが判明しています。

江戸城や河越城などを手掛け、築城に秀でた戦国武将の太田道灌 (城04) の書状には、文明6

(1474) 年に「小河に一宿」したと記してあり、これを中城とする説もあります。江戸時代の元禄11 (1698) 年には、旗本金田丹波守の陣屋が置かれました。

この城跡には、明治24年から42年まで、近隣の町村と共同で建設した組合立小川高等小学校が開かれ、「陣屋の学校」と呼ばれていました。地元では、今でも土塁が残る城跡の一角を「陣屋台」とも呼んでおり、仙覚律師 (万葉集01) の遺蹟もあるなどこの一角は文化財や寺社が集中する地域になっています。



生徒たちのなぎなたの授業の様子

【半僧坊と羅漢様】

中城跡の一角に半僧坊 (はんそうぼう) の小堂があります。昭和16年に静岡から半僧坊大権現を勧請して祀ったお堂です。武人や兵士の守護神とされたことから、召集され戦争に行く夫や息子の武運長久と無事の帰還を願ってお参りしました。

羅漢 (らかん) 様の石像は47体あり、全てに奉納者の名前が刻まれています。戦死者の霊を慰めるためと、無事に帰還を果たした人がお礼として奉納し今に残されています。



悲しみの中にもユーモラスな姿の羅漢様

(城03) 小川町の山城 青山城跡 (青山 2293 付近)

青山城は、仙元 (浅間) 山の南側標高265mの頂上付近に築城され、割谷城とも呼ばれていました。尾根伝いとなる小倉城 (城跡序文) からは約3kmほどで、尾根が三方から交わり深い谷のある急傾斜の険しい自然地形を巧みに利用しています。

築城は15世紀後半と考えられており、小田原北条氏の勢力下の松山城主上田氏のもとで鉢形・松山両城を結ぶ搦手 (からめて=裏側) を守る城としての役割を果たしていましたが、天正18 (1590) 年の松山城の落城と命運を共にし、他の山城とともに廃城になったと伝わっています。



山城の麓をのどかに走る八高線列車

## (城04) 小川町の山城 高見城(四ツ山城)跡(高見 1125 付近)



頂には四津山神社が祀られている

小川町の北に位置する高見・奈良梨地区は、鎌倉時代には鎌倉街道上道(かみつみち)が通っており、今もその一部の遺構が残されています。

高見城は、鎌倉街道や平野部を眼下に見渡せる四津山の山頂に築かれたので、四ツ山城とも呼ばれました。異変をいち早く察知すると、狼煙(のろし)を上げて他の山城に知らせます。戦国期、後北条氏の勢力下になると、鉢形・松山・河越の諸城を結ぶ軍事用道路としての役割はさらに増し、

奈良梨には、伝馬(てんま=駅=乗継用の馬が用意された場所)が置かれました。

室町時代になり、扇谷(おうぎがやつ)上杉と山内(やまのうち)上杉の権勢争いが激しくなると、ここ高見原も合戦の場となりました。扇谷方の太田道灌(城02)は、書状の中で各地の戦況や戦術などを記しており、日野城(現・秩父市)攻めの段には、「高見在陣衆者峠馳上山中可致警固(タカミニジンアリ、シュウノモノハ、トウゲヲハセノボリ、サンチュウヲケイゴイタスベシ:編集者解釈)」との記述があります。その頃の高見城主は、古河公方の家臣である増田四郎重富といわれています。天正18(1590)年の豊臣秀吉軍の関東平定により、城としての役割は終わりました。

## 俳句

### 松尾芭蕉の句碑

小川町内には8基の松尾芭蕉(はせを=ばしょう、本名・宗房)の句碑があります。江戸時代の中期以降から俳諧が大変盛んになりました。和歌(短歌)の5・7・5・7・7の31文字をさらに切り詰め、5・7・5という、わずか17文字の中に漢詩などの要素や滑稽さ・戯れ・遊びのこころを取り混ぜ凝縮した歌が詠まれるようになり、和歌から分岐するように、「俳句」という分野が創り出されていきました。

句碑は地元の俳人たちが、崇拜する芭蕉の俳句を年忌などの節目にあわせて造立したものだと思われます。この数は、深谷市(中仙道最大の宿場町)や行田市(忍藩十万石の城下町)に並ぶものであり、商都として小川の経済がそれらと同等に発展し、俳句をたしなむ余裕のある人々が多くいたことを示しています。

芭蕉は、「蕉翁」と尊崇され呼ばれています。芭蕉本人も意図的に老人のごとく立ち居振る舞っていた節があり、現代の多くの人は相当高齢の枯れた老人を想像するかと思いますが、その生涯を閉じたのは、五十歳の時です。

## (芭蕉01) 下里の滝(下里 2933 付近)

下里の滝は不動の滝とも呼ばれ、不動尊を祀る信仰の場でした。かつては、岩を叩き割るように水音を響かせて落ち、夏でも涼しく近郷にその名が知れていました。句碑は

そこに造立されたものです。

### 下里・槻川の滝畔の芭蕉句碑

蛇くふ（う）と きけばおそろし 雉  
（きじ）の声 （句集・花摘（はなつみ））

**大意：**（姿かたちは美しいが、）蛇を喰らうという話を耳にしたら、その鳴き声すら恐ろしく聞こえる。

**解説：**芭蕉の弟子の筆頭格ともいえる、宝井其角（きかく）が詠んだという、「うつくしき 顔かく雉の 距（けづめ＝蹴爪）かな」の句を受けて、蕉翁が返した句とされています。



繁殖期になるとオス雉は大変気性が荒くなり、「ケンケン！」と雄叫びを上げ縄張り争いを行います。一方、蛇は卵や小さなヒナを大好物にしますが、父性本能の強い親鳥に見つかったら最後、その強い脚力で押さえ付けられ鋭いくちばしによって突き殺されてしまいます。しかし、植物の種子や芽、昆虫類などを常食とする鳥なので、積極的に蛇を食べることはないでしょう。

### （芭蕉02） 小川八宮神社（小川990）



社殿の輪郭が美しく闇に浮かぶ

・合祀神社：青麻（あおそ）大社・諏訪社・御嶽社・大黒天

・例大祭：10月19日

・みどころ

八宮（やみや）神社社殿と青麻三光宮本殿は県指定有形文化財です。八宮神社の社殿は天保4（1833）年に、青麻宮本殿は天保13年に建築されたことが棟札からわかりました。

本殿と拝殿をつなぐ権現造りの社殿には、精巧で見事な彫刻が施されています。この彫刻は、妻沼聖天山（妻沼の聖天様）の境内に建立されている「歓喜院聖天堂」（平成27

年7月9日国宝指定）の造営に携わった、石原常八の一門の作といわれています。江戸時代の高い建築技術と彫刻は必見です。合祀されている大黒天の祭典日（12月1日）には、熊手売りの露天商が並び境内はにぎわいを見せます。

### 八宮神社の芭蕉句碑

先（まず）たのむ 椎（しい）の木もあり 夏木立 （句集・猿蓑（さるみの））  
弘化4（1847）年造立 造立者不明

**大意：**まずは（草庵よ）頼みにするぞ。椎の木陰もあり、夏木立に囲まれているではないか。

**解説：**芭蕉は、近江石山（滋賀県大津市）に「幻住庵」を結び、そこでしばらく静養しました。夏の炎天下を歩き詰め、息も絶え絶えにやっとたどり着いた粗末な庵は、涼と憩いを与えてくれる有難いものであり、妙に頼もしく思えたと日記に残しています。この句は、芭蕉が47歳のときに詠んだものとされています。

句碑を造立した当時は、八宮の境内地にも椎の大木が生えていたといわれています。

### （芭蕉03） 石青山大聖寺（天台宗）（下里 1857）

- ・ **ご本尊：**如意輪観音菩薩（によりりんかんのんぼさつ） 通称：下里の観音様
- ・ **縁日：**4月の20日（近い日曜日）

子育て観音として女性の信仰が厚く、縁日には女性の参詣でぎわいます。

#### ・みどころ

大聖寺（だいしょうじ）は下里の観音山の中腹に開かれた寺院であり、ここからは市街地や秩父連山が眺望できます。康永3（1344）年に造られた**石造法華経供養塔（六面幢）**は、同年に建立された板碑とともに**国の重要文化財**（町概要02-1）に指定されています。



全山緑のなか、観音堂の蔓の曲線は美しい

### 大聖寺観音堂の芭蕉句碑

観音の 蔓（いらか）見やりつ 花の雲（句集・未若葉（うらわかば））

明治29（1896）年 造立者 下里俳諧連中 書・田槐洲

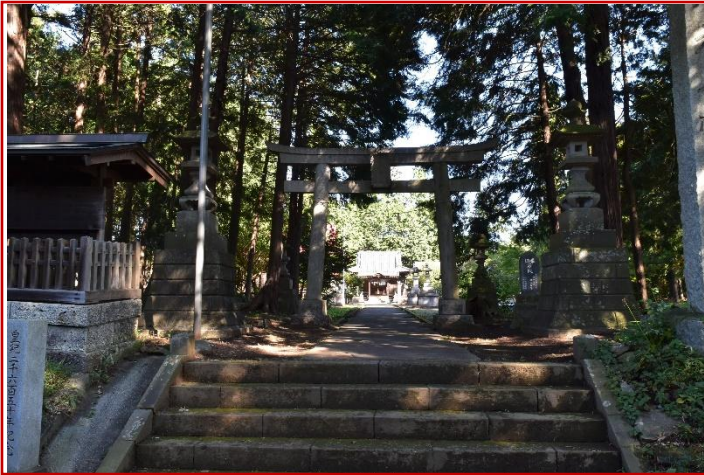
**大意：**遠くには（聖（しょう））観音様の屋根が見え、その向こうには、桜の花が雲のようにたなびいているぞ。

**解説：**この句を詠んだ当時、芭蕉は江戸深川の「芭蕉庵」で病の床に臥せていました。その床からは浅草寺の蔓が見えたことと記しています。句碑は下里の俳諧連の人たちが建立したものです。句碑は六観音のうちの一つ、如意輪観音を祀るお堂の傍らにあります。

### （芭蕉04） 大塚八幡神社（大塚 428）

- ・ **合祀神社：**日枝・神明・稲荷・愛宕・琴平・秋葉・産泰・疱瘡・天満・天神・天手長男の各社
- ・ **例大祭：**10月19日
- ・ **みどころ**

八幡台と呼ばれる台地の上に鎮座する小川町最大の神社は、合祀された末社の数も最多であり、かつては郷社でした。この地には元々は神明社が祀られ、その後山王社へと祭神が変わったと伝えられています。



広い境内地には神楽殿や相撲の土俵もある

今の八幡神社は、鎌倉幕府最後の鎌倉殿、九代将軍守邦親王が幕府滅亡後この地に逃れ、元弘3（1333）年に鎌倉の鶴岡八幡宮を境内に祀ったものと伝承されています。神社の行事や信仰にも守邦親王にちなむものが多く、親王の命日に当たる例大祭の日には、流鏝馬（やぶさめ）が奉納（昭和33年まで）されていました。南側の土手は今も馬場の面影をとどめています。

社務所東側の社叢には、町の天然記念物に指定されている目通り4.5メ

ートルに及ぶケヤキの大木があります。このケヤキは、八幡台地上にある井戸の水が涸れるのを防いでいると言い伝えられており、その近くに芭蕉句碑は造立されています。

### 大塚八幡神社の芭蕉句碑

はるもやや けしきととのふ（う） 月と梅 （句集・薦獅子（こもじし）集）

天保2（1831）年 造立者 梅皇山梅岑寺（ばいしんじ）修験者勝道（よしみち）

**大意：**ようやく春になって、月に梅の花と、景色を調える役者は揃った。

**解説：**芭蕉自らが、紅梅越しに見えるおぼろ月を描き、この句を賛として添えた自画自賛の掛け軸が残されています。句碑は、梅岑寺（神仏習合の江戸期にあった寺院）の修験者が造立したものです。

### （芭蕉05） 兜川河畔の芭蕉句碑（角山1104付近）

かけはしや 命をからむ 蔦（つた）かずら （句集・更科（さらしな）紀行）

明治35（1902）年 新道開通記念 造立者 加藤忠雄他四名

**大意：**かけはしは、蔦やかずらのツルで編まれている。我が命もそこに絡んでいる。

**解説：**この句は芭蕉45才の時、「木曾路にて」という前書きがあり、木曾の棧（かけはし）で詠んだ句です。

明治時代、町場の北は兜川によって分断され、対岸には角山村があり山裾は流れに削られた断崖となっている、まともな道もない難所だったと思われます。その山裾を切り崩し築造した新道は、「切り通し」と呼ばれました。この場所は今も道幅が狭く、句碑はここにふさわしいものです。

(芭蕉06) 青山氷川神社 (青山 1312)

- ・合祀神社：三峯明神
- ・例大祭： 10月中旬の日曜日
- ・みどころ

旧青山村の総鎮守として永享元(1429)年に創建され、当初は三峯明神(寺社15)と呼ばれていましたが、享保10(1725)年に氷川神社に改めたと伝わっています。

丘陵の中腹にある社殿を囲む照葉樹の森は、町の天然記念物に指定されています。

鳥居の前には、伊勢参宮記念の一对の灯笼が置かれています。江戸時代の文化4(1807)年に奉納した旨が刻されており、同種の記念石造物としては町内で最も古いものです。



神域はうっそうとした森におおわれている

青山氷川神社の芭蕉句碑

木(こ)のもとに 汁も鱈(なます)も さくらかな (句集・ひさご)

弘化4(1847)年 造立者 野崎以貞

**大意：**桜の木の下で宴を張っていると、汁椀も刺身を盛った皿も、花びらだらけ！

**解説：**青山村の以貞は、芭蕉の侘びを尊び芸術性の高い句風に傾倒し、句碑の建立を企てました。その願いを芭蕉150回忌の4年後に成就させています。

(芭蕉07) 春日公園の芭蕉句碑 (大塚 264-1)

梅がか(香)に のつと日の出る 山路かな (句集・炭俵(すみだわら))

文化9(1812)年造立 平成3年再造立 造立者 小川婦人会

**大意：**山道を旅していると、梅の香りに誘われて、お天道様がのつと出た！

**解説：**当初の句碑は、下古寺の梅松院の境内地内に造立されたといえます。同寺院が火災によって焼失したため、他村に移設されました。現在の句碑は、小川簡易裁判所跡地に春日公園が整備されることになり、その開設記念として有志の人たちによって再造立されたものです。

→昔のおがわ写真③

(芭蕉08) 松郷峠の芭蕉句碑 (上古寺 471 付近)

蝶の飛ぶ ばかり野中の 日かけ(げ)かな (句集・笈(おい)日記)

弘化3(1846)年 造立者 的場・吉合戸・青木

**大意：**日の光が降り注ぐ野原には蝶々しかない。日陰は、蝶の羽の下だけ。

**解説：**上古寺は山深く、ときがわ町の古刹慈光寺への参詣の道筋にある美しい里です。句碑はその峠道の旧道、今は山に帰したところに建てられているので探すのには苦労すると思います。

## 金子兜太の句碑

薄明に 倒れ木躍る 浅き眠り (第一句集・「少年」)

平和を願う反骨の俳人、金子兜太(とうた)は、大正8年に小川町の母親の実家で生まれました。日本銀行に入行間もなく太平洋戦争でトラック島(現ミクロネシア)に派兵され、幾多の死を間近に見、集団餓死に直面したという。だからこそ戦争に突き進むとする政権や政治姿勢には断固として反対し、それを俳句にも表しました。

五・七・五の文字数や季語にとらわれない自由律の前衛俳句の第一人者です。熊谷市名誉市民、皆野町名誉町民、現代俳句協会名誉会長、日本芸術院会員、文化功労者など数々の栄誉を受け、平成30年に98歳で天寿を全うしました。

父親も伊昔紅を号する俳人(医師・秩父音頭の作詩・編集者、皆野町名誉町民第1号)であり、皆野町の生家(壺春堂醫院主屋・土蔵)は小川町の田中家長屋(建築01)と同日に、国の登録有形文化財に登録されています。

この句碑は、兜太が一時期ここ東武竹沢駅から東京に通勤していたことから、駅西口に同駅開業90周年の記念として、地元民や企業、東武鉄道が協力して造立したものです。



東武竹沢駅西口に造立された句碑

## 寺 社

(寺社01) 八和田神社と奈良梨陣屋跡(奈良梨929)

### 八和田神社

・合祀神社：諏訪社(奈良梨)、稲荷社(上横田)、八宮・神明社(下横田)、神明・雷電社(伊勢根)、舩取(へとり)・八幡・神明・上浅間(かみせんげん)社(高谷)ほか

・例大祭：10月下旬の土・日曜日

・みどころ

八和田神社は、信濃国の諏訪大社と深い関係にあります。江戸時代のはじめ徳川家康は、鎌倉街道の要衝地である奈良梨などの支配を、信頼を置く諏訪頼水に命じました。頼水の父頼忠は、諏訪大社の大祝(だいほうり=最高位の神職)



2匹の子犬を連れた狛犬

でもあったため、陣屋を築く際に社殿を造営し、諏訪の祭神を勧請（かんじょう）して祀りました。

祭礼の様式も、信州地方独特のものが今も伝承されています。神輿渡御（とぎょ）には鎌と子どもたちが重要な役割を担います。鎌・矛（ほこ）・万灯（まんどう）を持った子どもたちが神輿を先導し、通り終わるとしめ縄を切って進みます。

明治40（1907）年、諏訪社に八和田村内の11社（どの社を数えてなのかは不明）を合祀して八和田神社に改称されました。境内の大杉は町指定の天然記念物です。また石造物も多彩で、特に子連れの狛犬はめずらしいものです。



北側には土塁が残されている

### 奈良梨陣屋跡

現在の八和田神社の周辺には土塁・堀跡が認められ、「奈良梨陣屋跡」として町の史跡に指定されています。この陣屋は諏訪氏が奈良梨の領主となったときに防御施設として作ったと伝わりますが、祭りの際に神輿が回る天王原の周辺に陣屋が置かれたとする説もあります。上野国総社に領地替えの後、頼水は譜代大名として諏訪の地に封じられました。

### （寺社02） 上小川神社（小川 68）

- ・合祀神社：八雲・神明・稲荷の各社
- ・例大祭： 7月末の土・日曜日（七夕まつりと同日）
- ・みどころ

昔、小川では秩父街道（現・国道 254 号）沿いに、市（歴史13）が開かれていました。この場所は市の東の入口前に当たり、今の社殿は、大正4年に新築されたものです。その際に、町の中央（本町2丁目交差点）にあった八雲社（市神様）の遷座とともに神明町にあった神明社、稲荷町にあった稲荷社も合祀し、社号を上小川神社に改めました。社号は、小川の総鎮守である下小川の八宮神社（芭蕉02）に対し、上手に位置することから付けられたといえます。



小学校の跡地に建立されたという

### （寺社03） 大塚の八坂神社（大塚 94）

- ・合祀神社：七夕神社・牛頭（ごず）天王・稲荷社
- ・例大祭： 7月末の土・日曜日



夏、疫病退散を願う祇園祭が開かれる



昭和の時代の祇園祭り風景(二葉前にて)

### ・みどころ

大塚の八坂神社は、町場の狭い場所に建てられています。小さな社ですが、疫病よけの神が祀られていることから多くの信仰を集めてきました。ここには、梅皇山梅岑寺（かつて存在した修験寺。大塚八幡神社に梅岑寺修験者が造立した芭蕉句碑（芭蕉04）があることからこの神域にあったのか？）に祀られている牛頭天王を分祠（ぶんし）しています。

釈迦が説法したという祇園精舎、その守護神が牛頭天王（町概要2-2）であり、この地に祀るとその靈験はあらたかで疫病は流行しなくなったと伝えられています。また、町場では商店や家内職人が多いことから、商売繁盛を願って伏見稲荷を合祀しており大黒天の塔も社殿裏にあります。

祇園祭は、小川でも盛んに行われ、かつては暴れ神輿が揉みあい警察騒ぎにもなったといえます。今も五つの町内に屋台があり、解体された状態で保存されています。

毎年七夕祭りでは、このうちの一つの屋台が組み立てられ、引き回しが行われます。

### （寺社04） 瑞龍山西光寺（曹洞宗）（小川1277）

・ご本尊：釈迦牟尼仏（しゃかむにぶつ）

### ・みどころ

地元では、大寺（おおてら）と呼ばれている禅寺です。参道の正面の鐘楼（鐘つき堂）、春にはしだれ桜やカタクリ（万葉集60）の咲く花の寺として知られ、たくさんの方が訪れます。境内から離れた場所に薬師堂があり、こちらのご本尊の薬師如来（やくしによらい）は眼病にご利益があるとされ、近在の人々に信仰されてきました。この「龍谷（たてや）薬師如来立像」は、平安時代の仏像で町の文化財に指定されています。

また、槻川にかかる大寺橋からの参道に立つお地藏様には、延宝元（1673）年建立の年号が刻まれています。年号が判読できる石仏としては、小川町で一番古いものです。



立派な鐘つき堂が凜と立

(寺社05) 高勝山長福寺(天台宗)(飯田 870)

- ・ご本尊：阿弥陀如来(あみだによらい)
- ・みどころ

長福寺には今日まで語り継がれてきた伝承があります……かつて、この寺は見るに堪えないほど荒れ果てていました。その有様を寺近くの天神山に館を構えた長尾四郎高勝(南北朝時代?)という武士が見かねて、十三世住職とともに再興しました。山号と寺号は高勝にちなんで付けられたといひます。境内には、高勝夫妻のお墓と伝えられる宝篋印塔(ほうきょういんとう)があります。この供養塔は、もと館跡の山中にあったものだとされています。



供養塔は昭和40年代、寺に移された



春、淡いピンクの花が迎えてくれる

(寺社06) 観喜山東昌寺(曹洞宗)(角山 293)

- ・ご本尊：釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)・薬師如来(やくしによらい)
- ・みどころ

参道わきに咲く大きなしだれ桜は遠方からも見え、町内外から多くの方が訪れます。境内には薬師堂があり、眼病の平癒を願った絵馬が奉納されています。薬師堂のご本尊である薬師如来立像は、室町から桃山時代に制作されたもの。町の文化財に指定されています。

(寺社07) 一機山輪禅寺(曹洞宗)(上横田 1215)

- ・ご本尊：釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)
- ・みどころ

甲斐源氏武田家ゆかりのお寺として知られています。本堂の西側高台に、一辺が18mに及ぶ生垣によって仕切られた区画が一族の墓域です。ここに天正三(1575)年の武田信實から万延元(1860)年銘の墓石まで、一族50基の墓石があります。

武田(川窪)信俊の筆による鷹の絵二幅とともに、武田氏一族の墓域が町の文化財に指定されています。

境内の木像稻荷は失せ物(紛失物)に霊験があり、地元の人々に信仰されてきました。千体地藏堂には、千体の地藏菩薩像が納められ、咲きみだれる萩の花とともに一見の価値があります。



墓石に刻まれた戒名もご覧あれ

(寺社08) 四津山と四津山神社 (高見 1125)

四津山 (よつやま) は小川町の北端に位置した独立丘陵であり、山頂部が4つに分かれて見えることから名付けられました。その頂からは、ふもとから遠くの山々まで四方をよく見渡すことができるため、鎌倉時代には山城(城04)が築かれました。当然、信仰の対象にもなっており四津山神社が祀られています。



新緑に輝く春の四津山

植生も豊かで、山頂部分から山腹の斜面には落葉樹や常緑樹が混生しています。それらが春先の芽吹き、秋の紅葉時には、山頂からふもとまでの縦じま模様になられた山容になり、植生がよくわかります。地質的にみると、四津山は三ツ子岩(※)に代表される大きな礫岩からなる山で、まわりの泥岩に比べ硬いことから浸食されにくく、ひととき高くそそり立って見えます。山麓には田畑が広がり、溜池や水路はいろいろな動物たちの棲みかになっています。

※小川町立図書館HP「民話と伝説①」参照

- ・四津山神社
- ・合祀神社：舩取(へとり)社・大山阿夫利社・疱瘡社・尺司社・六所社・浅間社・天神社・八雲社・熊野社・八幡社・菅原社
- ・例大祭： 4月24日
- ・みどころ

境内には神楽殿があり、大祭には神楽が奉納され、紅白の三角餅が神楽の奉奏者によって盛大に撒かれます。

(寺社09) 薬王山瑠璃光院普光寺(天台宗)(中爪 1042)



心頭滅却すれば火もまた涼し

- ・ご本尊：薬師如来(やくしによらい)
- ・縁日： 1月3日 大師祭
- ・みどころ

地元では、「小川厄除け大師」、「中爪の大師様」と親しみを込めて呼ばれています。そう呼ばれる大師とは、天台座主(てんだいざす)良源(慈恵大師(じえだいし)=元三大師)のことで、良源の命日の正月三日、境内では一年の厄除けを願った火渡修行が行われ、ダルマの市が立ちます。

徳川三代将軍家光から下げ渡されたという、寺宝の徳川家康画像は、町の文化財に指定されています。

(寺社10) 医王山圓光寺(臨濟宗)(青山345)

- ・ご本尊：薬師如来(やくしによらい)
- ・みどころ

寺伝によれば、圓光寺(えんこうじ)が開かれたのは、建長二(1250)年のことです。時の鎌倉幕府の執権北条時頼の招請によって、慈光寺の塔頭(たちゅう)となった靈山院(りょうぜんいん)三世の古伝崇井和尚が開山したと伝わります。本堂を見上げると熨斗(のし)瓦には、北条家と同じ家紋「三ツ鱗(うろこ)」がはめ込まれています。



近年、伽藍は建替えられ整備された

(寺社11) 北青山円城寺(曹洞宗)(青山654)



残念ながら薬師如来像は拝観できない

- ・ご本尊：釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)
- ・みどころ

円城寺は、治承四年富士川の戦において平家側に加わって敗れた、青山領主青木氏房の子が出家し開いたのが始まりとされています。その後青山城の城主であった青木左衛門が開基し、越生町の龍穩寺の大和尚を招いて開山、そのとき天台宗から曹洞宗に改宗したとされています。

境内には上部が水平な青石(歴史01)で作られた二連の板石塔婆があります。本堂には返子(ずし)が置かれており、その中に青石に彫られた板仏が納められています。石板には、仏を表現する梵字ではなく薬師如来坐像が線刻され、強調された蓮華座の下には薬師瑠璃光如来本願功德経(薬師経)の第七大願の一部、「我之名号 一經其耳 衆病悉除 身心安楽」と彫られている珍しいものです。

(寺社12) 岩伝山高西寺(真言宗智山派)(小川1368)

- ・ご本尊：地藏菩薩(じぞうぼさつ)
- ・みどころ

高西寺(こうさいじ)のご本尊の像は行基の作と伝わり、所願成就のご利益があるとされています。また、寺宝とされる弁財天像は空海(弘法大師)が相州(神奈川県)の江ノ島で護摩祈祷をした際に残った灰から作られたものだといわれています。境内には勢至菩薩(せいしぼさつ)を祀った二十三夜堂があり「三夜様」とよばれ、女性に厚く信仰されてきました。



仙元山のふもとにひっそりと寺はある

(寺社13) 青龍山慈眼寺(曹洞宗)(青山1609)



葦酒山門に入るを許さず

- ・ご本尊：聖観音菩薩(しょうかんのんぼさつ)
- ・みどころ

慈眼寺(じげんじ)には、「慈光七井戸」(注：慈光寺によれば、七井戸は全て同境内地にあります。)と呼ばれる井戸のうち、男井戸(おいど)と女井戸(めいど)の二つが残されています。

伝説(※)によれば、源頼朝が慈光寺(現ときがわ町)へ参詣する途中で慈眼寺に一晩泊り、翌日一人出立したそうです。残された家来たちが、炊事に使う水を求めて井戸を七か所掘ったものだと伝えられています。今も残るこの二つの井戸は、日照り続

きのときにも水涸れしたことがないといわれており、今日まで大切に守り続けられました。なお、井戸水を持ち帰ることはできません。

※小川町立図書館HP「民話と伝説②」参照

(寺社14) 呑龍様(どんりゅうさま)(小川220)

呑龍様は稲荷町の人たちが、安産・子育てにご利益があるとされる群馬県太田市の義重山大光院新田寺から勧請(かんじょう)しました。大光院は、徳川家康の命により徳川一族の繁栄と天下泰平、そして先祖の新田義重(にったよししげ=新田源氏の祖)の追善供養のための菩提寺として創建されました。この寺に相応しい僧侶として招へいされた人こそ呑龍上人です。

上人は、貧しさから捨てられた子どもたちを哀れみ、寺に引き取って小僧として育てたといいます。人々はその徳を敬い、親しみを込めて「子育て呑龍様」と呼びました。小川の呑龍堂の屋根の鬼瓦にも、三葉葵紋が入れられています。(歴史13)



子育て呑龍様は槻川沿いにある

(寺社15) 三峯神社(みつみねじんじゃ)

町場の路地を歩くと、三峯神社の小さな社が町内ごとにあります。家屋密集地の町場は、過去三度大火に襲われたと記録に残されています。そうしたことから、火防(ひぶせ)、盗難・害獣除け、商売繁盛に霊験あらたかだといわれる秩父の三峯神社の御祭神を、三峯講中の人たちが勧請して祀った社です。

「三峰」とは奥秩父にそびえる、「雲取山(標高2017m)・白岩山(1921m)・妙法ヶ岳(1329m?)」の三つの秀峰を指します。三峯神社は、そのうちの妙法ヶ岳の山腹(1102

m) に建てられた由緒ある神社です。同神社の伝承によると、日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東征のおり、この山に入ったときに山犬（＝日本狼・絶滅種）が道案内をしてくれたので、迷うことなく無事に山越えをすることができたのだと伝わります。そして、尊はこの地に仮屋を建て祖先である国生みの神、イザナギノミコトとイザナミノミコトを祀ったとされています。後には、日本武尊とともに眷属（けんぞく＝従者）の山犬（農作物を食い荒らす鹿や猪など、農家にとっての害獣を獲物とした）も祀られました。

また、尊は東征の途中、相武国で国造の軍から火攻めを受けました。その際に叔母の倭姫命から賜った三種の神器のうちの一つ、「天叢雲剣」（＝草薙剣）で草を薙ぎ払い、一緒に授けられた火打石で草に火をつけ、迎え火を放って窮地を脱したという神話が残されていることから、火伏の神としても信奉されたようです。

奥秩父の三山は、今も山岳信仰の聖域となっています。



家込みの中に祀られている

#### （寺社16） 侍峯山高福寺（臨済宗）（上古寺 872）

- ・ご本尊：阿弥陀如来（あみだによらい）
- ・みどころ

高福寺（こうふくじ）は、江戸時代は平村（現ときがわ町）慈光寺霊山院の末寺でした。寺伝によれば、元来は慈光寺所有の経蔵でしたが、明応七（1498）年十一月二十五日に松山城主上田能登守朝実が慈光寺を焼き討ちした際、この経蔵も焼失したといわれています。寛永二（1625）年二月、当地の小久保勘右衛門重信が霊山院二十三世の天英宗信和尚を招請し再興したと伝えられています。



山深い里の奥に寺はある

#### 「鎌倉殿の13人」に登場していた、武士の鑑（かがみ）畠山庄司次郎重忠

令和4年に放映されていたNHK大河ドラマの「鎌倉殿の13人」。高視聴率を終始保ちながら終話となりました。畠山重忠は、13人には入っていませんでしたが大いに物語を盛り上げました。鎌倉に変ありの報を聞いた重忠は、一族郎党を引き連れ馳せ参じました。しかし、これは執権北条時政の謀略であり、待ち構えた北条の大軍を相手に戦うこと数時間、奮闘空しく、重忠以下134騎は討ち取られてしまいました。その重忠の墓（清廉で



畠山重忠公の供養塔が納められた小さなお堂

あり、智勇兼備の将ゆえに多くの人たちに慕われ、ゆかりの地には同様な墓があります。)と云われる塚が上古寺の山中に残されているので、ここに紹介します。

「比企郡小川町は鎌倉時代には畠山と同じ男衾郡であった。小川町大河地区の**上古寺**に、伝**畠山重忠墓**(※)が残り、土峯山(標高293m)の頂上に低い塚を築き、祠の中に据えられている。高さ76cmの凝灰岩砂岩製の石造物で、平面六角形の笠を特徴とし、中台には蓮弁が施されている。土地では昔から

ここを「権現塚」あるいは「六郎庄司塚」とも呼んでいる。祠前の緑泥片岩製の石碑にその由来が記され、祠を守ってきた麓の小久保氏が明治時代に建立したものである。登山口には慈光寺の経堂を小久保氏が再興したと伝えられる高福寺が位置する。」(引用:「畠山重忠辞典」深谷市教育委員会編)

※小川町の歴史・通史編上巻、小川町立図書館HP「民話と伝説②」参照

### (寺社17) 笠山と笠山神社

・**ご祭神**:大日靈貴神、伊弉諾尊、伊邪那美尊、加具土神

・**例大祭**:5月3日、11月23日

町のシンボル笠山。美しく優しい山容から、親しみをこめて乳首山とも呼ばれています。山岳信仰の対象とされてきた霊山は、江戸時代には修験者の行場となりました。その山中に、笠山神社の上社と下社が造られています。

社には、主神として大日靈貴神(オオヒルメノムチノカミ=天照大神)が祀られています。古事記・日本書紀上の最高神であり、太陽と農耕も司ります。そのため、絹の町小川では特に養蚕農家の信仰があつく、神に豊作を祈願するとともに

お札を頂くために参詣しました。ムチノカミは、猫を眷属(けんぞく=従者)にしており、ネコを描いたお札を蚕室(さんしつ)に貼ると、飼育中のカイコを食い荒らす悪ネズミが逃げていくと信じられました。今や猫はペットとして一般家庭でも飼われていますが、江戸時代初期まではとても高価な動物であったため、庶民は実物を見たこともなく飼うことなど不可能でした。

今日、小川には養蚕を行う農家は全くいなくなりましたが、信仰そのものは変わりなく連綿と引き継がれています。また、ネコのお札は全国的にも珍しいので、コレクターや愛猫家がお札や御朱印を求めて参拝に訪れるようになりました。



あたかも乳首のように見える笠山の頂き(右側)

氏子安泰

武州小川町鎮座

空  
心  
社

武州東秩父村鎮座

令和六年五月三日



むか〜し昔のこと、十二支を決めるための動物たちの集まりがあったそうなの。その時にネズミは猫を欺いて、ウソの集合日を伝えた。当然に猫は欠席となった。ネズミは悪企みのとおり「子(ね)年」に入り、申出を行えなかった猫は干支に入れなかった。その恨みと憎しみは子々孫々まで続き、猫はネズミを目の敵にする。

## 万葉集

### (万葉集01) 仙覚律師遺蹟 (大塚 351 付近)

仙覚律師（せんがくりっし）は、奈良時代の終わりには解読困難となっていた『万葉集』の歌4500首余りを読み解き、我が国で初めての『万葉集註釈』を完成させた鎌倉時代の学問僧侶です。私たちが万葉歌を読むことができるのは、仙覚律師による読みと解読が基本となっています。

この『万葉集註釈』は麻師宇郷（ましうごう）すなわち小川町で完成させました。



中城跡に顕彰碑は建てられている



従四位の官位が見える

仙覚律師顕彰碑は昭和3年、昭和天皇即位大典の時に仙覚律師保存会によって建立され、県の旧跡に指定されています。

顕彰碑は八幡台の中城跡（城02）にあります。2基あり本碑が大きい方で、高さ4mもの大きな仙台石に彫られています。裏面には歌人佐々木信綱の歌がきざまれています。

小さい副碑には、「昭和三年十月十日天皇即位の大礼を挙げさせ給ふに当りて、畏（かしこ）くも仙覚に**従四位**を贈らせ給へり。昭和四年四月六日謹みてこれを勅す」とあります。

### (万葉集02) 万葉歌碑モニュメント

小川町は万葉集ゆかりの地です。小川町駅前通りから中城跡（城02）に向かう北裏通り沿いには、万葉歌碑が設けられています。それらを巡りながら進むと仙覚律師顕彰碑にたどり着くことができます。

日本最古の歌集である万葉集には、奈良時代を中心に約130年間に渡る短歌、長歌、旋頭歌（せどうか）など4500首以上が収められています。自然の豊かな情景に心を重ねて詠まれた歌が多く、約1500首に植物や花が詠みこまれています。モニュメントは、その中から68首の歌を選び解説を付け、その歌にふさわしい小川の情景や花の写真と案内を添えています。なお、本誌の解説と写真はモニュメントとは異なります。



**まち歩きマップ 万葉集版をお読みください。**

# まち歩きMAP

## “駅周辺”

～広域版は表紙のQRコードから～

ヤオコー

芭蕉04

万葉集01

城02

歴02

目次のこの番号を  
ご覧ください

歴08

観09・観17

観02

増尾 栃本親水公園



# 昔のおがわ 感じルート MAP



比企銀行  
P6 (歴史05) 参照

①



埼玉県立小川製紙研究所  
P21 (建築05) 参照

②



小川郵便局  
P9 (歴史12) 参照 ④



槻川でのボート遊び  
P12 (観光02) 参照 ⑤



第八十五銀行小川支店  
P6 (歴史05) 参照 ⑥



小川簡易裁判所全景  
P28 (芭蕉07) 参照 ③



小川町風景 (福助前)  
P21 (建築08) 参照 ⑦

